

令和8年度研究推進計画

1. 研究主題

自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする

児童生徒の育成

－「他者・自己・社会との『対話』を通して」（1年次）－

2. 研究主題設定の理由

本校には、児童同士の繋がりが強く、互いの良さを認め合える土壌がある。また、自分の思いを教師や友達に対して素直に表現できる児童が多く、日頃から温かなコミュニケーションが図られている。道徳科の時間においても、教材の登場人物の心情に共感したり、自分の経験と重ね合わせて素直に発言したりする姿が見られる。一方、道徳科の対話場面において、教師と児童生徒の一对一でやり取りが行われていたり、ワークシートに記入したことを伝えることに終始したりする状況が散見され、対話を通して自分の考えを広げたり深めたりすることに課題が見られた。また、日常生活に生かされる道徳教育を目指して、道徳学習プログラムを実施してきたが、より自分事として捉え、考えを深めていくことにも課題が見られた。

これらの課題を踏まえ、本校では、令和7年度に研究主題を「自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成―対話的な学びに焦点を当てて―」と設定し、研究を進めた。その結果、意識調査「道徳科の授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている」という項目では、肯定的評価が88.2%から92.1%に上昇した。また、研究主題に関わる意識調査「道徳科の授業で勉強したことを、自分の生活にいかしている」でも、肯定的評価が84.8%から87.3%に上昇した。このことは、道徳科における対話場面設定の工夫をしたこと、授業づくりシートを活用した授業改善を行ったこと、より自分事として考えることができる道徳学習プログラムを実施したこと等に効果があったと考えられる。

一方で、課題も挙げられる。昨年度、対話的な活動を意識的に道徳科に取り入れることで、児童が安心して自分の考えを表現し、友達の意見を基に対話する場面が増えてきたが、自分とは異なる視点からの意見を吟味したり、自分の考えと比較して再構成したりするまでには至っていない。児童同士の意見の繋がりを生む教師の手立てや、いろいろな人と対話する場面の設定が不十分であったことが挙げられる。また、このことは、本校独自の課題ではなく、学校区全体の課題だと考える。

そこで、今年度は対話の対象を「他者」「自己」「社会」と定義し、自分とは異なる視点の「他者」や「社会」との対話を通して考えを広げ、広げた視点を再び自分事として捉え直し、「自己」と対話する思考の往還を通して自分の考えを再構成していくことが、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に繋がっていくと考え、本研究主題を設定した。

3. 研究についての基本的な考え

3.1. 自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとするとは

3.1.1 自己の生き方についての考えを深めることについて

荒木（2021）は、道徳科における重要な学習活動として、「自己を見つめ、自己の生き方について考える（自己との関わりで道徳的価値を捉える）活動と、多面的・多角的に物事を捉える活動」（p. 40）の2つを挙げている。本研究で焦点を当てる1つ目の学習活動、「自己（人間として）の生き方について考えを深める」（括弧内は中学校）ことについて、永田（2017）は、「道徳的価値のよさや意義、困難さ、多様さなどを理解し、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われる」と述べている。また、浅見（2021）は、「伸ばしたい自己を深く見つめられるようにし、それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めていくこと」（p. 155）と述べている。

ここからは、自己の生き方について考えを深めるためには、道徳的価値を自分自身に引き寄せて考えること、その活動を通して自分なりに深めた道徳的価値への理解を基に自分自身の生き方に関する思いをもつことが求められていることが分かる。

これらのことから、本研究における自己の生き方についての考えを深めるとは、「道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止め、道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考え、自らのこれからの生き方について思いをもつこと」とする。

3.1.2 よりよく生きようとする児童生徒とは

道徳科の目標である道徳性は、よりよく生きるための基盤となるものであり、道徳教育が目指す方向について、文部科学省（2018）には、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものである」（p. 15）と述べられている。このことから、道徳科での学びは、道徳科の時間のみならず、様々な生活場面において児童生徒が生かすことを目指したものとする事が分かる。

また、生活場面において児童生徒の道徳性が発揮されることにより、さらにその道徳性は高まり、道徳科の時間の充実が図られるものと考ええる。

このことについて、木原（2021）は、各教科等においてはぐくまれる3つの資質・能力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性」）は、「道徳教育を推進するための基盤となる力として、各教科等の特質に応じてさまざまに内在している」と述べ、道徳性との有機的な関連が不可欠であることを指摘している。

以上のことから、本研究で目指す、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の様態を、「道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考えたことを基にもった、自らのこれからの生き方についての思いを、生活場面において生かしたりさらに思いを深めたりしようとする姿」とする。

3.2 「他者・自己・社会との『対話』」とは

3.2.1 道徳科における対話的な学びとは

本研究では、「他者」「自己」「社会」との対話を通して、自らの考えを広げ、深めることによって、よりよく生きようとする児童生徒を育成していきたいと考える。

道徳科における対話的な学びについて、中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）では、次のように示されている。

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向き合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）より

また、加藤（2019a）は対話的な学びについて次のように整理している。

表 1 主体的・対話的で深い学び

対話的な学び	友達との対話 ・コミュニケーション・知的コラボレーション ・収束的思考と拡散的思考 ・方法にとどまらず目標となる能力でもある。 書物（先哲）との対話 ・知識からの一見の基盤としての百聞、見方・考えの深め 自己との対話 ・自己の在り方、生き方のメタ認知
--------	--

対話的な学びの整理（表 1）には、自己との対話も挙げられているが、自己内対話の中で行われる自己の在り方、生き方をメタ認知することは、まさに、本研究で目指すところである。

また、新川（2020）は、この「道徳科における対話的な学び」の実現に向けて、指導のポイントを次の 3 つに整理している。

① 対話への目的意識がある。

「何のために対話するのか」ということが、教師と子供、子供と子供の間で共有されているか

② 対話による考えの広がりや深まりへの充実感がある。

多様な考え方ができる中心発問、自他の考えについて、多面的・多角的な見方によって考えが吟味できるような補助発問であるか

③ 対話の方法やふるまいなどの育成がされている。

対話するための方法が身についているか、互いが意見を言いやすい共感的な雰囲気があるか

本研究で設定した「他者」「自己」「社会」との対話は、永田（2014）が提唱する「多層的な対話」の概念を基盤としている。永田は、道徳的価値の自覚を深める過程において、「自己内対話（自分を見つめる）」「他者との対話（友達と議論する）」「教材との対話（登場人物や先哲の生き方に学ぶ）」の三つの層が有機的に関連し合う重要性を指摘している。本研究では、この概念を本校の実

態に即して再構成する。本校は、これまでもコミュニティ・スクールの仕組みを生かし、道徳科の授業にゲストティーチャーを招く取組を行ってきた。地域の方の話を聞くことで、より自分事として道徳的価値について捉えることができたが、地域の方と対話することで考えを深めるまでには至っておらず、保護者を巻き込んだ対話の充実にも課題を抱えていた。また、45 分の授業内で行われる「先哲や教材との対話」を、友達との対話を通してより深化させることで、そのため、本研究の対話の対象を「他者」「自己」「社会」の 3 つに分類し、それらを往還する構成をとるものとした。

3.2.2 他者・自己・社会との『対話』に焦点を当てた取組

他者・自己・社会との「対話」に焦点を当てた取組について、表 2 に示し、具体を述べる。

表 2 「他者」「自己」「社会」との対話の取組

	他者 (友達・教師・先哲・教材等)	自己	社会 (家庭・地域等)
道徳科授業	①他者との「練り合い」を生む授業改善	②他者・社会との対話と自己内対話の往還	③GT との対話場面設定の工夫
道徳学習プログラム	⑤振り返り、育てたい心の共有	④自己を見つめるハートかがやきプログラムの作成	⑥家庭との連携

【道徳科の授業】

① 「練り合い」を生む授業改善

「練り合い」とは、自分とは異なる考えに触れ、それらを比較したり、ぶつけ合ったりする中で、自分の道徳観を問い直し、より深く、納得できる価値を見出していくプロセスを指す。学年の発達段階に応じて、「練り合い」は、「自分の外側にある意見に気づくこと」から始まり、最終的に「それらを取り込んで自分の価値観を再構築すること」へとステップアップしていく。

表 3 「練り合い」のポイント

	「練り合い」の段階	「練り合い」の視点
低学年	「気付き」	「視点の多様性」 自分と友達の考えが「同じ」「違う」ことに気付き、道徳的な視点を増やす
中学年	「比較」	「理由の共通点・相違点」 単なる意見の相違ではなく、「なぜそう考えたか」という「理由（根拠）」に注目して比べる
高学年以降	「再構築」	「多角的な納得解」 異なる意見の良さを認めつつ、多角的な視点から自分の考えを深め、自分なりの「納得解」を見出す

この「練り合い」を生むために、対話を促す ICT の効果的な活用と、主題解釈と発問の工夫を行う。ICT の効果的な活用では、主に道徳科の授業の中で、自分の考えをもったり、他者の考えを知ったりするなど、何のために使うのか、どのような効果があるのかを明らかにしながら行っていく。主題解釈と発問の工夫では、宮里（宮里 2022：pp. 22-23）が主題をとらえる観点として提唱している「そ

の大切さ」「それを行うことの難しさ」「難しさを超えてなおの大切さ」の3つを取り入れた授業づくりシートを活用し、主題解釈をもとにねらいや中心発問、さらに深める発問を考えることを通して、道徳科の授業において他者との対話や自己内対話が生まれ、対話を通して道徳的価値の理解を広げたり深めたりできるようにする。

授業づくりシート		学校：_____ 学年・組： 年 組 授業者：_____
①【内容項目】 _____		
②【内容項目にかかわる児童の実態】 before _____		
③【主題】 _____		
④【ねらい】 道徳的判断力・道徳的心情・道徳的実践意欲と態度。		
自分（自己理解） 他者（他者理解） 自分（自己理解） 他者（他者理解） 自分（自己理解） 他者（他者理解）	⑤（この主題はなぜ大切な） _____	⑥ _____
	⑦（この主題の難しさは？できないときはどんなときか？） _____	⑧ _____
	⑨（難しさを超えて、大切にしたいのはなぜ？） _____	前 _____
	⑩【学習指導要領を見よう】 _____ ⑪【発達段階ごとのキーワード】 _____ （内容項目の概要） _____ （指導の要点） _____	
⑫【教材】 _____ ⑬【設定】 _____ ⑭【教材から本時の主題を焦点化すると】主題解釈を踏まえてこの教材で何を考えさせるのか、 ⑮【めあて】 _____ ⑯【教材のどの部分で一番考えさせたいか】 （自分） _____ （他者） _____ ⑰【中心発問】 _____ ⑱【児童生徒の予想される発問】 _____ _____ ⑲【さらに深める発問】 _____ ⑳【本時終了後にねらいに迫った児童生徒の発言】 after _____ _____ 【メモ】 _____		

図1 授業づくりシート

② 他者・社会との対話と自己内対話の往還

時間の保障や自己内対話に導くための発問をする等、それぞれの対話が往還するような学習場面の設定をする。そのことによって、他者・社会との対話により広がった視野や思考を、再び自分事として捉え直し、「自己」と対話する思考の往還を通して、自分の考えを再構成していくことができるようにする。

③ GT との対話場面設定の工夫

自分とは異なる年齢、立場のゲストティーチャーを道徳科の授業に招き、思いを聞いたり対話したりすることで児童が考えを広げていく場を設定する。年度当初に年に1回以上GTを招いた授業を計画し、GTの思いを生かす授業構想を考えていく。

【道徳学習プログラム】

④ 自己を見つめるハートかがやきプログラムの作成

令和7年度は、より個に応じた学び、生活に生かされる学びとするために、「個別最適な学び」の「学習の個性化」の考えを取り入れ、児童生徒一人一人が重点的に育てたい道徳的価値を設定する

「ハートかがやきプログラム」を作成した。一つの道徳的価値を複数の教材や活動を通して多面的・多角的に取り扱うことで、児童生徒はその価値を深く考え、生活の様々な場面と繋げながら自分事として捉えることができた。

一方で、自己の課題を客観的に把握し、適切な内容項目を選択することに難しさを感じる児童生徒も見受けられ、個に応じた教師の支援の在り方が課題として挙げられた。そこで、本年度は、1学期に学校全体の重点目標に基づいた道徳学習プログラムを実施し、同じ価値についてクラスで多面的・多角的に考えることを通して、学校として重点的に育成を目指す資質・能力を育むとともに、一つの価値に対して多様な視点からアプローチする姿勢を養うことを目指した。2学期は、1学期に培った「多面的な視点」を足掛かりとして自己の在り方を客観的に見つめ、その上で、個々の実態に応じた「育てたい心」を自ら選択し、道徳学習プログラムを作成・実施する。

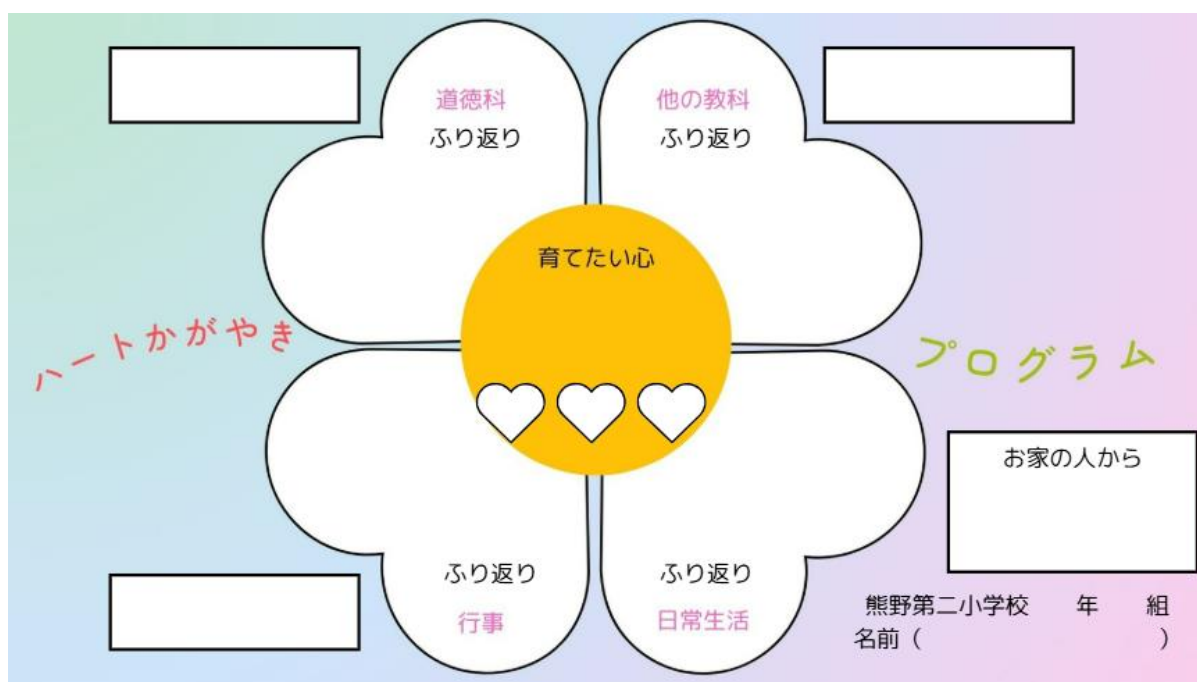


図2 ハートかがやきプログラム

⑤ ハートかがやきプログラムの共有（個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向け、児童生徒が自らの変容を自覚し、それを他者と共有する場を設定する。1学期は、振り返りを行うごとに、児童生徒が記入した振り返りの中から主だったものを拡大版に教師が記入し、他者の思考に触れる機会を意識的に設けていく。2学期は、個々の「育てたい心」を掲示したり、自己の成長を育った心の数で可視化し、拡大掲示資料にシールで反映させたりする活動を行う。そしてこれらは長期的な視点でみるために心の成長が蓄積されていくようにする。これらの取組を通して、児童生徒相互の学び合いや励まし合いを活性化させることで、自己の生き方についての考えを深めさせ、多面的・多角的な視点から道徳的価値の自覚を深める道徳性の育成を図っていく。

⑥ 家庭との連携

学校での学びを家庭での生活場面へとつなぎ、保護者との共感的な対話を重ねることは、児童生徒が自己の生き方について見つめ直す貴重な機会となる。「ハートかがやきプログラム」に保護者からの記

入欄を設け、学級通信等を通じて具体的な取組を紹介することで、学校と家庭が「育てたい心」を共有していく。学校と家庭が双方向から児童生徒を見守り、変容を認め励まし合うことで、日常生活のあらゆる場面においてよりよく生きようとする道徳性を、より確かなものとして養うことができると考える。

4. 研究仮説

他者・自己・社会との「対話場面設定」の工夫をすれば、児童生徒は多面的・多角的な視点をもとに自分の考えを再構成し、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒を育成することができるであろう。

5. 研究の内容

- 道徳科の授業づくりに関わる理論研修
- 他者・自己・社会との対話に焦点を当てた道徳科の授業づくり、および道徳学習プログラムデザイン
- 「道徳教育推進拠点校地域事業」の連携校（熊野中学校・熊野第四小学校）との連携
 - ・ 熊野中学校区道徳推進協議会における合同理論研修・指導案検討
 - ・ 推進リーダー教師と連携校によるティーム・ティーチングの授業実施および道徳教育推進に関わる情報の共有

6. 年次計画

- （１）１年次／今年度
 - ① 研究全般に関する理論研究
 - ② 道徳学習プログラムの実施
 - ③ 道徳科の授業実践
 - ④ 研究の方向性及び内容の吟味と修正
- （２）２年次／来年度
 - ① １年次の成果と課題をもとにした授業改善
 - ② 授業実践
 - ③ 研究のまとめ

7. 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
・他者・自己・社会との「対話場面設定」（他者との「練り合い」を生む授業改善、GT との対話場面設定）を工夫することは、自己の生き方について考えを深める児童生徒の育成に有効だったか。	・教師の授業内容（実践記録を含む）評価（行動観察、ワークシート） ・教師対象の意識アンケート ・評価
・他者・自己・社会との「対話場面設定」（自己を見つめるプログラム）を工夫することは、自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に有効だったか。	・拠点校事業意識調査 ・抽出児行動観察 ・抽出児童の道徳学習プログラム振り返り記録

8. 検証計画

4 月	研究主題・検証計画立案と提案
	第 1 回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
5 月	第 1 回アンケート調査の分析と考察・抽出児童決定
6 月～7 月	研究授業の実施
7 月	第 2 回アンケート調査実施（中心校児童・中心校教師）
	第 2 回アンケート調査の分析と考察
8 月	1 学期の実践記録の分析と考察
9 月	研究授業の実施
10 月	公開研究会の実施
12 月	第 3 回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
1 月	第 3 回アンケート調査の分析と考察
2 月	研究のまとめ・次年度の計画立案

9. 検証のための実践計画

月	日	研究内容
4	3	校内研修…研究推進計画・学習指導案型提案・授業者決定
4	9	道徳教育連絡協議会部会 ◆道徳教育部会①…研究の概要、協議 (参加者：校長・宇田) 3校担当者連絡会
4		校内研修…授業づくりシート、道徳学習プログラム作成 等
5	18	第1回道徳教育推進協議会 ◆道徳教育部会②…町全体の道徳教育推進について (参加者：校長・宇田)
5	27	校内研修…模擬授業・指導案検討、授業研究日程調整 等
6	29	第1回研究授業（〇年〇組）（T2：推進リーダー） ◆道徳教育部会③
6		校内研修…授業づくりシート、指導案作成
6		3校担当者連絡会
7	8	第1回道徳教育推進リーダー研修（〇年〇組）（T2：推進リーダー）
7		3校担当者連絡会
8	7	合同研修…指導案検討、理論研修、研究会授業の模擬授業等 ◆道徳教育部会④（参加者：中心校・連携校教員全員）
8		校内研修…研究会の指導案修正・研究会計画準備
8		3校担当者連絡会
8		校内研修…模擬授業・指導案検討
9	9	第2回研究授業（がんくま）（〇年〇組）（T2：推進リーダー）
9		3校担当者連絡会
10	2	公開研究会、研究授業（第二小：〇年〇組、〇年〇組、〇年〇組、 熊四小：〇年〇組） ◆道徳教育部会⑤（参加者：中心校・連携校教員全員）
11		道徳参観日
11		3校担当者連絡会
12		たんぽぽ学級研究授業（たんぽぽ1組・2組）
1		校内研修…研究のまとめ
2		第2回道徳教育推進協議会 第2回研究授業 熊中（〇年〇組） ◆道徳教育部会⑦
3		3校担当者連絡会
3		校内研修…令和9年度に向けて

【引用・参考文献】

浅見哲也（2021）「道徳科 授業構想グランドデザイン」明治図書出版株式会社.

荒木寿友（2021）「いちばんわかりやすい道徳の授業づくり対話する道徳をデザインする」明治図書出版株式会社.

木原一彰（2021）「第 22 章 各教科等との連動による相乗効果で道徳教育の可能性を開く」『新道徳教育全集 第 3 巻 幼稚園、小学校における新しい道徳教育』株式会社学文社、pp.186-187.

永田繁雄（2017）「平成 29 年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科 道徳」東洋館出版社.

宮里智恵（2022）「あらためて知りたい教材分析法 心情曲線を生かした教材分析」『道徳教育 10 月号』明治図書出版株式会社.

文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」廣済堂あかつき株式会社.

中央教育審議会（2016a）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」 p 50, p 225

加藤明（2019a）「新学習指導要領をひもとく」文溪堂

新川靖（2020）「道徳授業における『主体的・対話的で深い学び』と道徳科の目標についての一考察」

永田茂雄（2014）「『対話』で深まる道徳授業—主体的に学び、自ら考える子どもを育てる」明治図書出版